

富勢地域 ウォーキング マップ



晴れたら境内から
筑波山が望めます!!

鏝形紹甫

くわがたしょうほ (1833~1903)

一茶のような遊歴の和算家で70年の生涯を柏の地で終え、薬師堂に葬られた。富勢村、手賀村、湖北村、風早村、我孫子村、田中村の人々と門人が建てた直方体の御影石の墓塔は二メートル余に及ぶ。地域の豪農と言われる人は、自分の家に紹甫を泊らせて和算を習い、村に必要な算術の知識を教わったという。広い知識と教養をもち、村民の子弟にも諸分野の学問を教えていた。算師・和算家としての名も高かった。※平成7年、紅龍山東海寺墓地(寺山ふるさと会館奥)へ移設された。

北柏駅南口	12分	①北星神社	6分	②東陽寺	27分	③須賀神社	4分	④宿連寺湧水	25分	⑤香取神社	5分	⑥善照寺	10分	⑦八坂神社	12分	⑧南龍寺	5分	⑨鏝形紹甫墓塔	13分	⑩日枝神社	5分	⑪野口家長屋門	7分	⑫圓性寺	16分	我孫子駅行バス停	25分	⑬布施弁天	15分	⑭七里ヶ渡跡
	800m	400m	1.7km	250m	1.5km	200m	600m	800m	340m	830m	300m	400m	1.0km																	

※ 区間の時間は目安です

900m (往復) 14分

⑧布施城址

庚申塔

中国の道教に由来した庚申信仰に基づいて建てられた石塔。60日に一度巡ってくる庚(かのえ)申(さる)の日に徹夜する『庚申待ち』が、江戸時代中頃から農村地域で盛んに行われた。人の身中には三尸(さんし)と云う三匹の虫がいて、庚申の日の夜、寝ている間に身体から抜けだして天に昇り、犯した罪を帝釈天に報告し、帝釈天はそれに応じてその人の寿命を縮めるので、この夜は眠らないで虫を抜け出せなくするという。

仏教では庚申の本尊は青面金剛で、この虫を押さえる力を持つといわれる。憤怒の形相をして三猿(見ざる、聞かざる、言わざるの3匹の猿)を従者にしている。庚申信仰が盛んになった背景に、当時、不治の病として恐れられた労咳(結核)は帝釈天のなせる業と考えられて、労咳除けの信仰が加味されるようになった。本尊となった青面金剛を刻む庚申塔が造塔されたのはこのためでもあったと解釈されている。街道沿いに置かれ道標を彫付けたものも多い。さらに塞神として村の境目に建立されることもあった。

馬頭観音

インド神話に登場するヒンズー教の説話に由来。衆生の無智・煩惱を排除し諸悪を削ぎ落とす菩薩で、重き障りを大食の馬のごとく食らい尽くすといわれる。時代を経るうちに馬頭を頂いた観音様の像を拝観する民間信仰に発展してゆき、馬の守護仏(牛馬の神様)としても祀られるようになった。車がなかった時代には、馬を交通手段として荷役や情報伝達の助けにしたり、農家では家族同然に扱われるほど貴重な存在で、商売の一助を担っていた大切な馬が死んだ際の慰霊や、馬の無病息災、道中の安全祈願などに石仏の馬頭観音をお祀りする信仰が広まっていた。「馬頭観音」の文字だけ彫られた石碑は多くが愛馬への供養として祀られたものである。

企画・製作 柏市富勢地域ふるさと協議会 総務部
印刷協力 柏市布施近隣センター
柏市布施1196-5 TEL 04-7132-3100

① 北星神社 亀と北斗星を祀る 元根戸村の村社

祭神：天御中主命。明治9年(1876)に改称されるまで「妙見宮」と呼ばれ親しまれた。相馬根戸城主が妙見菩薩(北辰・北斗七星を神格化)を祀ったといわれ、文政7年(1824)、氏子による祭礼や奉謝が行われた記録がある。相馬氏の城館には、守護神である妙見菩薩が祀られ、妙見信仰では亀が菩薩の乗る聖なる生き物で北斗を示す玄武・亀の神獣とされた。



② 東陽寺 昔、寺子屋が開かれた

本尊：阿彌陀如来。明治6年(1873)我孫子から杉山兎四朗先生を迎えて「根戸学校」が開校。明治33年(1900)布施尋常小学校と合併して、富勢尋常小学校を開校した。開校当初は布施を第一教場、根戸を第二教場として勉強を続けた。学問発生の地、地元の人々の信仰の寺として親しまれてきた。寺の由来は火災で焼失して残されていない。



③ 須賀神社 昔は富勢村の鎮守様

祭神：素戔鳴尊。約400年前の天正年間(1573~1593)に鎮座。悪疫、悪病除けの守り神として10km四方から崇敬者が毎年参拝に訪れたという。かつて、布施河岸から神社を通り加村(現流山市)までの道は米穀やうなぎ、魚介類などを運ぶ「うなぎ道」又は「諏訪道」と言われ、神社は道標の役割を担っていたとも考えられている。諏訪道は江戸時代には諏訪神社(流山市駒木)へ参詣する信仰の道でもあり、大変賑わった街道だった。



④ 宿連寺湧水 巨人伝説にまつわる昔話

「柏のむかしばなし」から 昔、布施村にデイダラボッチと呼ばれる背の高さ3m近い大男が住んでいた。村に日照りが続いた年のある夜、『布施の弁天さまをひとまたぎする者がいれば 雨が降る』という夢を見て、布施の弁天さまをひとまたぎして雨を降らせ、利根川をまたいで筑波山の方へ去って行ったという。湧水は、ひとまたぎした時にできた右足跡。左足跡はあけぼの山公園下にあった。



⑤ 香取神社 布施村の鎮守社として信仰を集めた「古谷の香取神社」

祭神：経津主神。江戸時代中・後期にかけて利根川水運の船着き場「布施河岸」として繁栄した布施村の鎮守様。本殿側面のひのき彫刻は、安政3年(1856)江戸後期の名工・石川三之助信光の作といわれ、中国の歴史小説『水滸伝』を題材にした「司馬温喜と水瓶割り」、「竹松打虎」、「硫黄と張良」の3点が収められている。



拝殿



水滸伝・司馬温喜と水瓶割り(彫刻の一点)



神殿

⑥ 善照寺 七百年の歴史ある「時宗」の寺

本尊：阿彌陀如来。乾元元年(1302)一遍上人の弟子で遊行寺二世真教上人の開創。時宗の開祖は鎌倉時代の僧・一遍上人(別名・遊行上人)。遊行寺の世代聖人になった者は、必ず遊行しながら全国の寺院を廻って布教を重ねることが慣習となっていて、村誌には享保12年(1727)、五十代遊行上人が来寺したことが記載されている。その様子は、早くからの準備やもてなしと盛大な法要で大変賑わい、布施地域や周辺村落からの絶大なる協力を得ながら催された。「善光寺式阿彌陀三尊立像」(鎌倉時代後期造)は柏市指定文化財。



筆子塚(筆子中)



阿彌陀三尊立像



境内の一遍上人像

⑦ 八坂神社 牛頭天王(祇園精舎の守護神)を祀った

祭神：素戔鳴尊。古記録に、享保20年(1735)に布施村疫病流行につき祈禱のため牛頭天王を勧請し祀った記載がある。通称「天王さん」といわれた。明治元年(1868)の神仏分離令によって八坂神社と改称された。裏手には旧東海時の跡地が残る。



⑧ 布施城址 戦国時代に相馬氏の拠点であった

県立柏高校から利根川を臨む東側は城山とよばれ、標高10数メートルの台地上に城が所在した。東西450m×南北300mほどの大きさであったと推定され、古谷の地名がある台地一帯が城域だった。守谷相馬氏が、旧常陸川(現利根川)の水上権確保や当地を支配するために築いて一族を配した。東側には「御城」「中条」「外城」の地名や屋号を持つ旧家がある。



柏斎場内にある碑

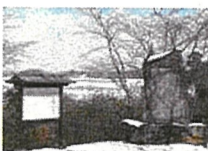
⑨ 南龍寺 富勢小学校の前進・天真学校発祥の地

本尊：大日如来。開山は元和8年(1622)。正保4年(1647)寂蓮社尊上人雲哲大和尚の創建。山門は薬医門、山門額は大本山・増上寺大僧上の筆による。明治5年(1872)学制公布の翌年9月「天真学校」が開校。後に公立布施小学校と改称、善照寺へ移転を経て現富勢小学校となる。歴代上人墓地には、筆子29名により建立された第19世「注誉満阿光圓明和尚」の筆子塚(筆子中)がある。



⑩ 小林一茶俳文碑 「米蒔くもつみぞよ鶏が気合うぞよ」 一茶

句碑は、東海寺を見下ろすさくら山の奥にあって、その文体は一茶直筆の墨跡を拡大して刻入したもの。文化9年(1812)に流山の俳友・秋元双樹と布施弁天に詣でた際に詠んだ句。布施や俳僧・鶴老上人がいる守谷の西林寺は、俳友仲間との交流に大切な場所だった。



⑪ 布施弁天 紅龍山布施弁天東海寺 浅草、江ノ島とならぶ関東三弁天



本堂



楼門



鐘楼

本堂、楼門、鐘楼は平成18年千葉県指定有形文化財。奈良時代・大同2年(807)弘法大師空海の開創といわれている。弘仁14年(823)嵯峨天皇より堂塔伽藍を建立され、勅願所(天皇が天災鎮静や疫病封じなど国家鎮護、安穩を祈願する寺社)に指定される。本堂向拝の回柱に菊の紋章があるのはそのため。宝永2年(1705)古谷にあった妙見の地(⑦の裏手)より東海寺を移して弁財天を本尊とした神仏混合の形をとった。最も繁栄した時期は、本堂の建立された享保元年(1716)以降天明7年(1787)頃の70年間と言われ、布施河岸や七里ヶ渡の渡船でにぎわう水上交通の要衝に近接していたことも繁栄の要因だった。

⑫ 日枝神社 土谷津の七社様境内に祀られる

祭神：大山咋神、宝永3年(1704)建立
香取社：経津主神、今宮社：倭大物主命、三峰社：伊佐諾尊、雷神社：別雷神、天神社：菅原道真公、山王大権現、道祖神が合祀されている。



⑬ 野口家長屋門

長屋門は、近世諸大名の「武家屋敷門」として発生した形式で江戸時代に多く建てられた。郷村武士の家格を持つ家や苗字帯刀を許された裕福な農家・庄屋でも作られ、明治以降は富豪の家屋敷にも造られるようになった。門の両側部分は使用人の住居、納屋、作業所などに利用された。



⑭ 圓性寺 地元の俳人「中尾嘯花」句碑

本尊：不動明王。本堂の左手奥に清水観音、右に妙見様の祠がある。庚申塔や青面金剛などの石塔群には、一茶と交流があった俳人「嘯花」(しょうか)の庚申句碑が現存する。「嘯花」(中尾彦兵衛)は、柏・我孫子市域に名の残された数少ない俳人の一人。文化元年(1804)に庚申講の世話役をした際に句碑が建立された。(中尾嘯花句集「いほりのちり」の一節が自然石に刻まれている)



「庚申の夜を月花に明けけり」嘯花句碑

⑮ 七里ヶ渡跡 スズカケの大樹と水神石塔

利根川の渡船場で、布施と対岸の戸頭(現・取手市)への渡しは平安時代以前から存在したようだ。利根川が完成する承応3年(1654)以前は藪沼といわれる湖沼が点在していた。水戸道を根戸で分岐し、布施と戸頭の間を利根川を渡って守谷へ向かう街道は「守谷道」と呼ばれ、江戸幕府が軍事的な意味から利根川に橋を架けなかったため、渡し船で人々の往来が行われていた。江戸時代には参勤交代にも使われ、享保15年(1730)小張・谷田部を経由して土浦まで開通したこともあって、水戸街道の脇道として盛んに利用された。享保年間(1716~1735)以降は河岸の活動も始まり下総と常陸を結ぶ要衝として栄えた。



※寺子屋②⑨と筆子塚⑥⑨

寺子屋の起源は室町時代といわれ、中世の教育が寺で行われたことに由来する。元禄3年(1690)頃からは農、漁村へも広がり、江戸時代後期(1830年代)から幕末にかけて著しく増加した。明治5年(1872)に学制が布かれると、校舎建設や教員養成の追いつかない初期には、既存の教育施設である寺子屋が活用された。大規模な寺子屋は初期の小学校として使われ、基本的な読み方、習字、算数の習得に始まり、人名や書簡の作成など実生活に必要な教育が行われた。当時の寺子屋の師匠は、一生の師である例が多かった。寺子屋の生徒を「筆子」といい、師匠が死んだ時には筆子が費用を出し合っって師匠の墓を建てるのが珍しくなかった。そのような墓を「筆子塚(筆子中)」という。